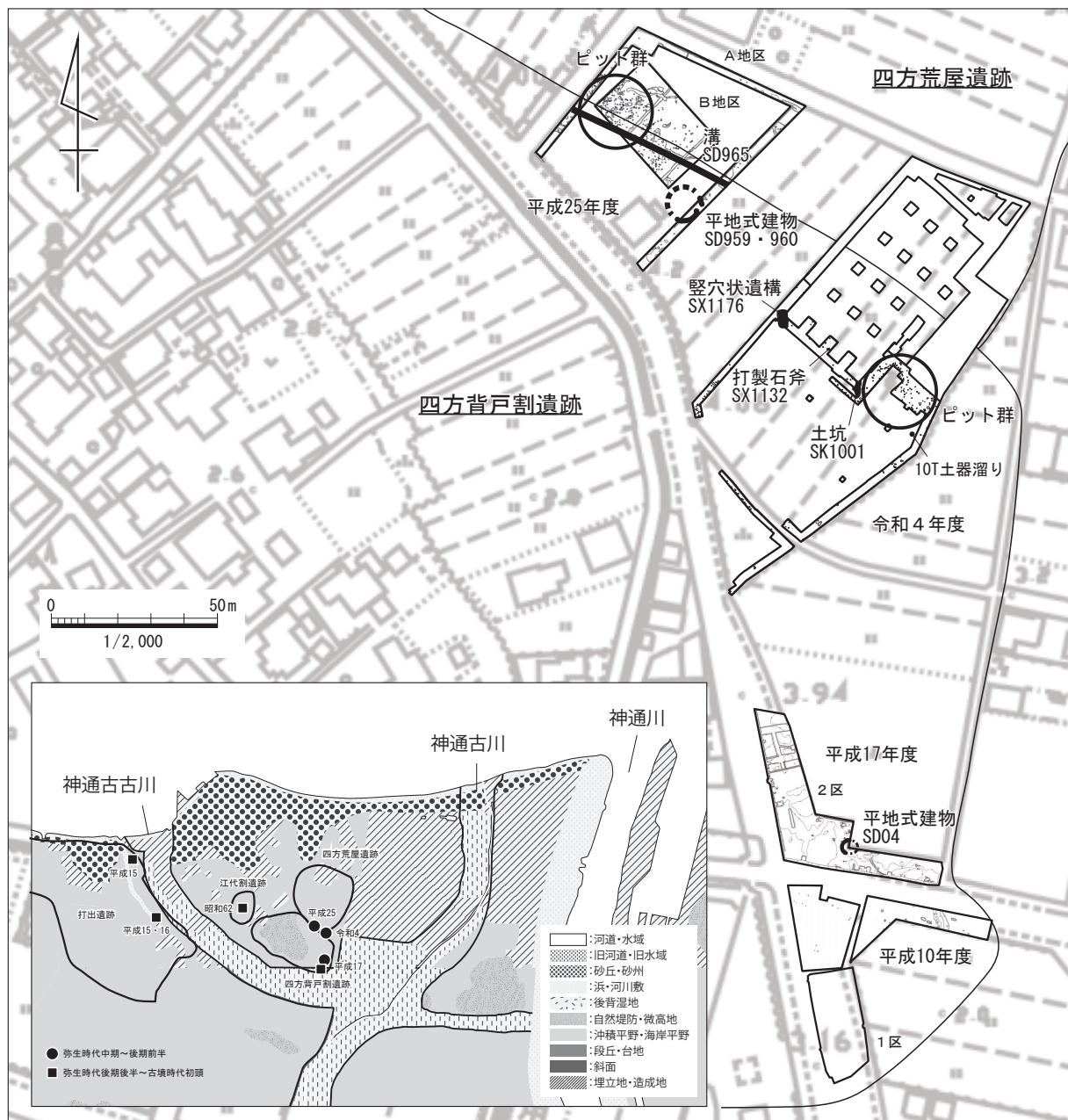


## 第5章 総 括

### 第1節 弥生時代

四方背戸割遺跡の下層調査において、弥生時代中期の土坑 SK1001 を検出した。また上層遺構に混入した弥生時代中期の土器片も一定量あり、調査地区周辺に弥生時代中期の遺構が存在することが想定される（第36図）。調査区の北東部 L14～016 グリッド付近には、径 20m ほどの広がりをもつピット群が存在する。SK1001 はピット群の西端に位置する溝状の土坑で、またピット群の南端には同じく中期の弥生土器がまとまって出土した試掘トレンチ 10T がある。同じ径 20m 規模のピット群を囲むように土坑（溝状を含む）が存在する様子は、隣接する四方荒屋遺跡の平成 25 年度調査でも認められ（富山市教委 2014）、調査地周辺には弥生時代中期の複数のピット群が存在する可能性がある。



第36図 弥生時代中期の四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡

遺物や炉跡が未検出であることから、ピット群を建物跡と判断するのは現状では難しく、平成25年度調査で平地式建物の周溝と想定されたSD959・960や平成17年度調査の四方背戸割遺跡の周溝状の溝SD04（富山市教委2006a）、今回の調査で検出した6本柱の堅穴状遺構SX1176などを念頭に、中期の建物跡が今後明らかにされることが期待される。遺跡内では打製石斧の製作も行われていたと考えられる（SX1132）。また平成17年度調査の栗林式土器、今回の調査で出土した貝田町式土器は、中期における他地域との交流を示す遺物である。

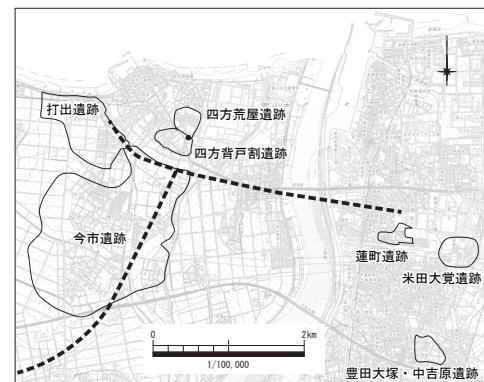
中期の遺構の上には基本層序IV層の堆積がある。IV層は神通古古川の氾濫に由来する堆積層と考えられ、今回の調査ではほとんど遺物を含んでいなかった。IV層中の唯一の遺物といえる壺（45）は著しく摩滅しており、氾濫に伴って混入した可能性が高い。平成25年度調査の四方荒屋遺跡SD965は弥生時代中期の直線的な溝であるが、有機物を含む黒色土がみられずにIV層に近い土で埋没しており、遺物には天王山式を含む後期前半の土器が少量含まれる。SD965は後期前半に洪水で埋没したと判断される。周辺の江代割遺跡・打出遺跡においても後期前半の土器は散見されるが、いずれも包含層からの出土であり、明確な遺構は検出されていない。後期前半は洪水が繰り返される湿潤な環境へと変化したことが想定される（小黒2015）。四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡は平成17・25年度調査と今回の調査で天王山式土器が出土し、後期前半の土器の大部分を占めている。その分布状況は中期の遺構分布と重なっており、中期の集落が後期前半まで継続したことを示している。

神通古古川沿岸の弥生時代において、本遺跡周辺にはいち早く集落が形成されたが、頻発する洪水が収束した後期後半には対岸の打出遺跡で本格的な集落形成が始まる。打出遺跡では後期後半～古墳時代前期までの多様な遺物が出土し、鉄器の保有状況などから神通川河口付近における交流拠点としての性格が指摘されている（富山市教委2006b）。本遺跡周辺は、平成17年度調査の包含層から後期後半～古墳時代初頭の土器が大量に出土したものの、現状では建物跡の検出には至っていない。

## 第2節 平安時代

四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡においては、これまで古代の遺構・遺物がほとんど確認されていなかった。平成8年度の四方荒屋遺跡において、9世紀代の土師器・須恵器が少量出土した程度であった（富山市教委2000）。今回も広い調査面積に対して、須恵器の出土は数点に留まり、本遺跡における須恵器の少なさを踏襲する結果となった。土師器は調査区全体に塊ないし甕の細片が散在するが、SK94・95では9世紀後半の塊がまとまって出土した。塊の多くは赤彩され、灯明皿として使用されている。遺物が出土しなかったSK96も含め、2.5mほどの範囲に土坑が存在することから、同時期の土坑と考えられる。

今回の調査地点は、神通古古川を挟んで今市遺跡で検出された古代道路状遺構の北側延長線上にあたるが、古代の道路跡や溝は検出されなかった。打出遺跡から南下する古代道路と交差して途切れるものと考えられる（第37図、富山市教委2006b・2013b）。四方荒屋遺跡の平成8年度調査で古代の柱穴を9世紀代の畝状遺構が切っているように、本遺跡周辺は平安時代には畠地として利用され始めたと考えられる。SK94・95は、生産域のなかにあって灯明皿を使用した何らかの行為が行われたことを窺わせる。



第37図 古代道路推定図

### 第3節 中世

今回の調査で検出した中近世の畠跡は、南北畠（A群）と東西畠（B群）に分けられ、両者が交錯する状況であった。四方荒屋遺跡ではこれまで畠跡の調査事例があり（平成8・11・25年度）、南北畠ないし東西畠が検出されている。断面観察によると東西畠が南北畠より古く、同様の新旧の切り合いは平成8年度第2地区でも確認されている（富山市教委2000）。また平成11年度F・G地区では東西畠のみを検出したが、中世のある段階で掘立柱建物や井戸を伴う居住域へ変化している。さらに北に隣接する四方北窪遺跡で検出された畠跡は中世のものとされ、東西畠である（富山市教委1999a）。このような状況から、東西畠は中世を主体とするものと判断される。

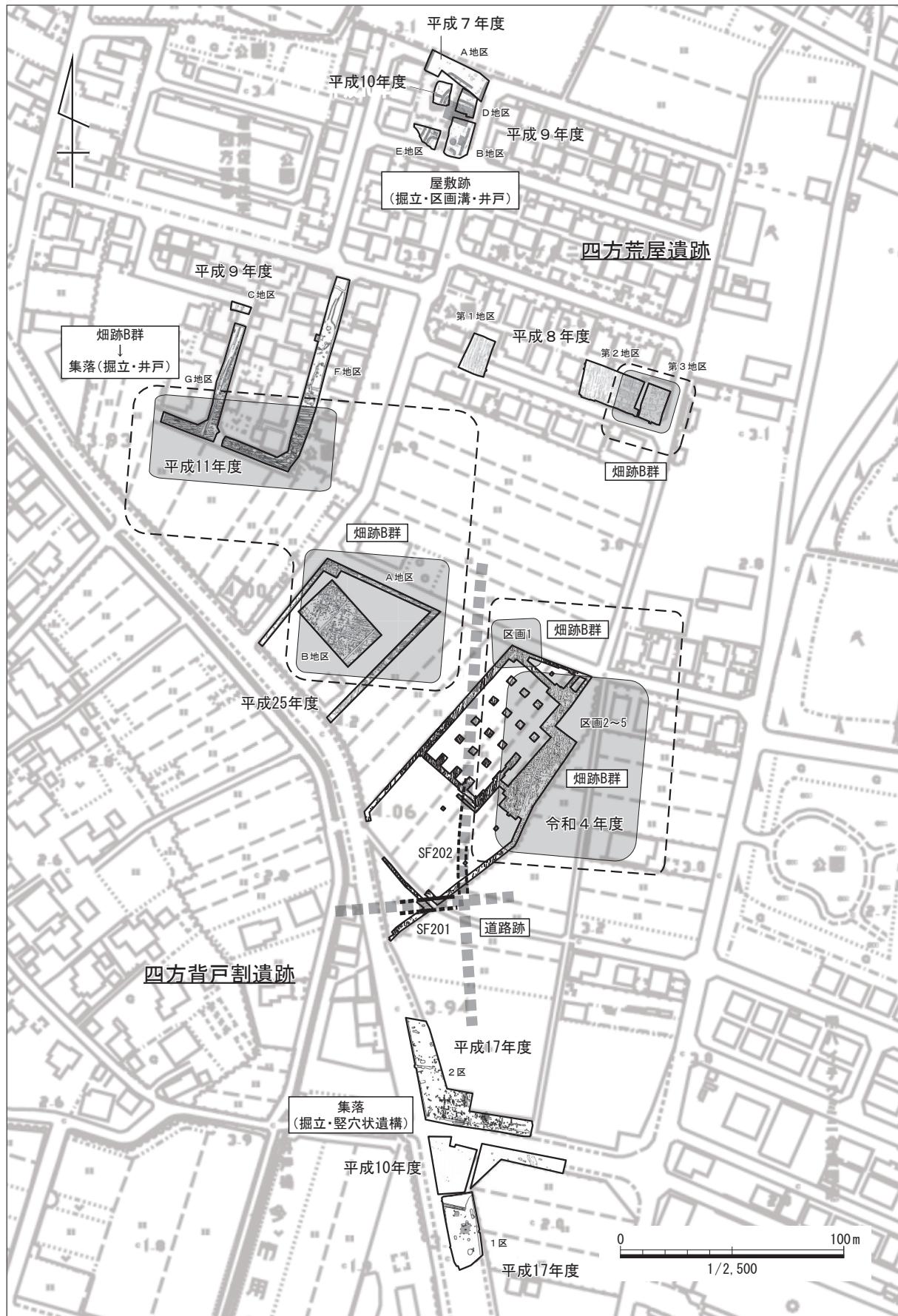
中世の道路跡SF202はやや東に向きを変えながら北へ延びているが、その先は大型建物と倉庫・井戸を伴う中世屋敷（富山市教委1999a・2008a）へと至る可能性がある。南は中世の掘立柱建物群を検出した四方背戸割遺跡1・2区（富山市教委2006a）の集落へ向かう（第38図）。SF202は屋敷と集落を結ぶ道路跡と位置付けられ、その両側に東西畠の畠跡が展開する。屋敷の前面となる北側と東西の道路跡SF201より南側には東西畠の畠跡は検出されないことから、最大で200m四方（4町歩）の畠跡が想定される。東西畠の畠跡は14世紀以降とされる屋敷と同時期と考えられるが、13世紀代の珠洲も散見することから、時期が遡る可能性もある。平成9年度調査の四方荒屋遺跡では中世屋敷から12世紀後半～13世紀前半の白磁碗が、今回の調査でもSK125から白磁碗が出土しており、この時期に中世屋敷の前身集落が形成されていたことも想定される。

SF201はSF202と調査区外で直交する位置関係にあるが、SF202より規模が大きく、少なくとも2回の掘り直しがある直線的な道路跡である。西側は四方荒屋の集落から旧神通川流路を越え、打出集落の南方に向かう方位である。同所は平成15年度調査の打出遺跡（富山市教委2004）にほど近く、同調査では13～14世紀の掘立柱建物や井戸、15世紀の道路跡が検出され、四方荒屋遺跡の屋敷と同時期に存在した集落である。SF201は両者を結ぶ、より広域の道路跡と位置付けられる。またSF201の北側溝SD01は水路としても利用されており、当地が排水性が極めて高い土地であること、畠跡の上手に位置することから灌漑用水路として機能したことも想定される。東西畠の区画1は他の区画と異なって方位が西に寄っており、その方位がSD01と近いことから、東西畠のなかでも新しい時期のものと考えられる。16世紀後半に発生した神通川の流路変更に伴う洪水により、中世屋敷や畠跡は廃絶したと考えられるが、SD01ではわずかであるが肥前の出土があり、最終的な埋没は近世まで下る可能性もある。

中世の畠跡（東西畠）は畠溝の重複が少なく、畠溝覆土に含まれる地山塊が近世の畠跡（南北畠）に比べ大きいなど、近世の畠跡と比較したときに、耕作面積や期間がより限定的な利用であった可能性がある。

### 第4節 近世

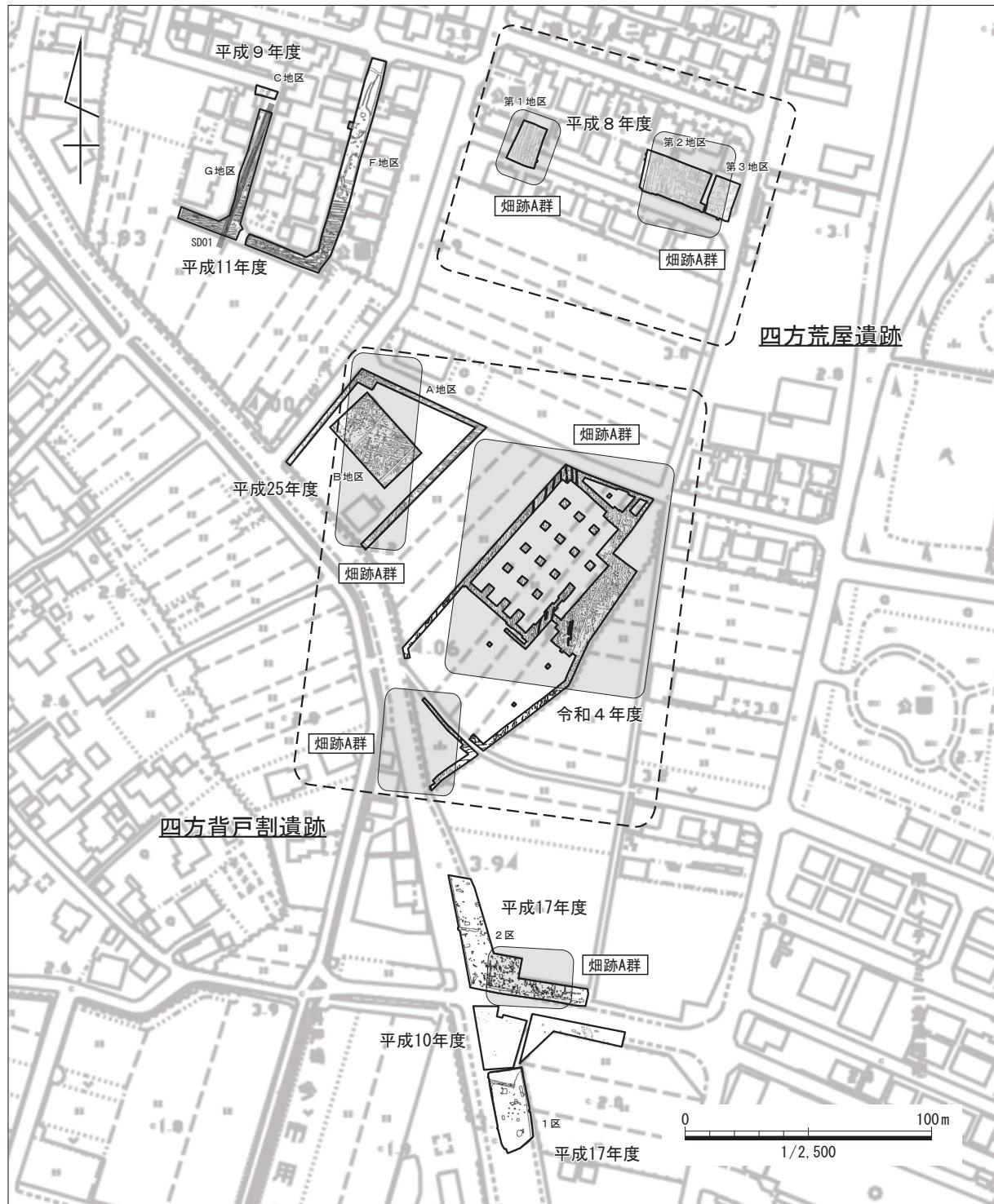
近世の四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡は南北畠の畠跡が広く展開すると考えられる（第39図）。ただし畠跡の畠溝から近世遺物が出土することは稀で、今回の調査でも上層遺構検出面や近代以降の溝から若干の近世陶磁器が出土したものの、畠溝からの出土はなかった。平成8年度調査の四方荒屋遺跡では、第2地区の畠跡から近世遺物が出土したとの記載がある（富山市教委2000）。畠跡検出面上の包含層では、平成7・9年度調査の四方荒屋遺跡で17～18世紀を主体とする越中瀬戸、肥前、唐津が（富山市教委2008a）、平成25年度調査の四方荒屋遺跡では、18世紀後半から19世紀とされる越中瀬戸、肥前、泥面子（加工円盤含む）などが出土している（富山市教委2014）。このような断片



第38図 中世の四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡

的な遺物の出土状況に加え、1858年の飛越地震による灰褐色噴砂(富山市教委1999a)との切り合いで、南北畝が噴砂より古いことが今回の調査で確認されたことから、南北畝が近世の畠跡である可能性がより高まったといえる。

南北畝は今回の調査と平成25年度四方荒屋遺跡の調査で一つのまとまりがある。そのなかには東西幅およそ20mを基準とする南北に長い短冊形の区画が複数ある。一部には東西幅40mほどの大区画や、底面に工具痕が残るやや深い畝溝が集中する部分など、各区画は一様ではない。中世の東西畝



第39図 近世の四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡

に比べて畝溝の重複も多く、畝溝に含まれる地山塊の粒径も小さくなることから、畝立てを繰り返しながら、畑として長期間利用されたことが窺われる。また平成8年度調査の四方荒屋遺跡でも南北畝のまとまりがあり、あわせて一つの畑跡になる可能性がある。その場合は、少なくとも6町歩（南北300m、東西200m）ほどの耕作面積が想定される。また南側では平成17年度調査の四方背戸割遺跡2区の畝状遺構があり、埋没が進んだ神通古古川の沿岸近くまで耕地が広がる様子が窺われる。

中世の東西畝が近世になって南北畝に変わることは、中世後期に再び洪水が頻発し、河跡湖的な状況であった神通古古川が完全に埋没したことが影響したと考えられる（小黒2015）。周辺の用排水は、北流する神通古古川に沿った方位に切り替えられた。平成9年度調査の四方荒屋遺跡G地区SD01は越中瀬戸が出土する幅2.4mの大溝であるが、畑跡と同じく南北に延びることから、近世の農地を支える基幹的な水路であったと考えられる。

本遺跡周辺は神通古古川・神通古古川とともに近い位置にあり、両者の影響を強く受ける場所であったことは想像に難くない。各時代の遺構の消長は、この両者が引き起こす洪水など自然環境に大きく左右されたことであろう。洪水堆積物が形成した自然堤防上では、水はけの良い土地を生かして、各時代を通じて畑地としての利用が盛んであったことが分かる。

（常深）

#### 引用・参考文献

- 小黒智久 2015「弥生時代後期～古墳時代前期の河川環境と遺跡動態－富山市打出遺跡焼却建物跡SI01の発掘調査成果が示す諸問題」  
『富山市考古資料館紀要』第34号 富山市考古資料館  
小葉田淳 1986「冷泉為広卿の「越後下向日記」と越中の旅路」『富山史壇』第92号 越中史壇会  
中世岩瀬湊調査研究グループ 2004「「海中から中世岩瀬湊を探る」15年度海底探査報告」『富山市日本海文化研究所報』第33号  
富山市日本海文化研究所  
富山県富山農林振興センター・富山市教育委員会 2012『富山市百塚住吉D遺跡発掘調査報告書II』  
財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2014『小竹貝塚発掘調査報告』  
財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2015『打出遺跡発掘調査報告』  
富山市教育委員会 1974『富山市小竹貝塚範囲確認調査報告書』  
富山市教育委員会 1987『長岡杉林遺跡』  
富山市教育委員会 1996『富山市千原崎遺跡発掘調査報告書』  
富山市教育委員会 1998『史跡北代遺跡発掘調査概要II』  
富山市教育委員会 1999a『富山市四方背戸割遺跡発掘調査報告書』  
富山市教育委員会 1999b『富山市千原崎遺跡発掘調査概要』  
富山市教育委員会・富山市埋蔵文化財調査委員会 1999『富山市四方荒屋遺跡発掘調査概要』3/29  
富山市教育委員会 2000『富山市四方荒屋遺跡発掘調査報告書』  
富山市教育委員会・環境事業団富山建設事務所 2003『富山市長岡八町遺跡発掘調査報告書』  
富山市教育委員会 2004『富山市打出遺跡発掘調査報告書』  
富山市教育委員会 2006a『富山市四方背戸割遺跡発掘調査報告書』  
富山市教育委員会 2006b『富山市打出遺跡発掘調査報告書』  
富山市教育委員会 2008a『富山市四方荒屋遺跡発掘調査報告書』  
富山市教育委員会 2008b『富山市八町II遺跡発掘調査報告書』  
富山市教育委員会 2009『富山市百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡発掘調査報告書』  
富山市教育委員会 2011『富山市内遺跡発掘調査概要V－砂川カタダ遺跡・今市遺跡－』  
富山市教育委員会 2012『富山市百塚遺跡発掘調査報告書』  
富山市教育委員会 2013a『富山市四方背戸割遺跡発掘調査報告書』3/15  
富山市教育委員会 2013b『富山市今市遺跡発掘調査報告書』  
富山市教育委員会 2014『富山市四方荒屋遺跡発掘調査報告書』  
富山市教育委員会 2015『富山市八ヶ山A遺跡発掘調査報告書』  
富山市教育委員会 2020『富山市番神山古墳・番神山横穴墓群発掘調査報告書』  
富山市教育委員会 2022『富山市番神山横穴墓群・吳羽山古墳群発掘調査報告書』  
西井龍儀・藤田富士夫 1976「吳羽山丘陵周辺の先土器・縄文時代草創期の遺跡について」『大境』第6号 富山考古学会  
根津明義 2006「越中国射水郡における諸郷の所在について」『富山史壇』第149号 越中史壇会  
古川知明 2005「神通川底出土遺物のこと」『草島校下の歴史』第50号 草島校下郷土史会  
古川知明・野垣好史・小林高太・蓮沼優介 2010「富山藩主前田家墓所長岡御廟所基礎調査報告」『富山市考古資料館紀要』第29号  
富山市考古資料館  
堀沢祐一 1996「北代加茂下III遺跡の縄文時代の掘立柱建物について」『富山市考古資料館報』No.30 富山市考古資料館  
堀沢祐一 1997「縄文時代中期掘立柱建物の一考察－北代加茂下III遺跡掘立柱建物の検討－」『富山市考古資料館紀要』第16号  
富山市考古資料館  
山本信夫 2000「4, 陶磁器分類」『大宰府条坊跡 XV』太宰府市教育員会  
吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館